非典型的な目的語の意味構造について

濱　田　英　人

0．はじめに

小稿では（1a）の軽動詞構文や（1b）のようなV-NP-PP型のイディオム表現そして（1c）の同族目的語構造を認知文法の枠組を用いて分析し，次の2つの問題を議論することによってその性質を明らかにすることを試みる。

(1)　a. Mary had a rest.

　　b. John made fun of Bill.

　　c. Harry smiled a warm smile.

つまり，1つは(1)の *a rest*, *fun*, *a warm smile* のそれぞれは一応は目的語として扱われ得るものであるが，典型的な目的語とは異なり，(2)が示すようにこのような要素を主語とした受動文は容認されない。

(2)　a. *A rest was had by Mary.

　　b. *Fun was made of Bill by John.

　　c. *A warm smile was smiled by Harry.

従来の研究ではこれら3つの構造の目的語のもつ非典型的な性質が個別的に扱われる場合が多かったが，小稿ではそれぞれの構造をLangackerの提唱する認知文法の概念や仮定を用いて特徴付け，それらの意味構造のもつ共通性について述べる。

2つ目として，受動文の容認可能性の視点から，このような目的語の非典型性が必ずしも固定的なものではなく，適切な動機付けがあればその目的語性が高まり，このような要素を主語とした受動文も容認可能となることを1つ目の問題の議論と平行して論じる。

そこで，まず議論に先立ちここでの問題点を簡単に整理しておくと，軽動詞

構文については(3)の2つの文は同じ構造をなしているが，それに対応する受動文（4a）と（4b）では容認可能性に差がある。

(3) a. They took a pleasant walk across the field.

b. We took a ten-minute break between classes.

(4) a. *A pleasant walk was taken across the field.

b. A ten-minute break was taken between classes.

この場合，（3b）の *took* は軽動詞ではなく，むしろ本来的な動作性が強く，*a ten-minute break* も純粋な目的語であるという議論も可能である。しかしそうすると動詞が軽動詞であるかどうかや，目的語のいわゆる「目的語らしさ」の違いが何によって生じるのかという疑問がでてくるが，従来の研究では十分に明確な説明がなさていない。

次にイディオム表現内部の目的語について考えてみると，（1b）のような V-NP-PP 型のイディオム表現ではその内部の名詞を主語とした受動文と前置詞の目的語を主語とした受動文では，(5)のようにその両方が容認可能なものと，(6)のようにどちらか一方しか容認されないものがあることはよく知られている。

(5) a. Advantage was taken of John.

b. John was taken advantage of.

(6) a. *Fun is being made of John by his friends.

b. John is being made fun of by his friends. (Bresnan 1982: 57)

このことに関して Bresnan（1982）は *take advantage of* のような表現が二重の受動文（double passive）が可能であるのはこうした表現が語彙目録（lexicon）で2つの構造を付与されているからであると述べている。つまり，一つは(7a)のようにイディオム内部の名詞が目的語として分析される場合で，従って（5a）は（8a）の構造をもつが，それに対して，もう一つの分析は（7b）のように内部の名詞が動詞に編入（incorporate）されて全体が複合動詞（complex verb）として分析される場合で，この場合は（5b）は（8b）の構造をもつという主張である[1]。

(7) a. take: V, 'TAKE-ADVANTAGE-OF ((SUBJ), (OF OBJ))'
(OBJ FORM) = ADVANTAGE

b. $[\text{take}]_{V}[\text{advantage}]_{N}$: V,
'TAKE-ADVANTAGE-OF ((SUBJ), (OF OBJ))'

(8) a. $[_{S}[_{NP}\text{advantage}][_{VP}\text{was}[_{V}\text{taken}][_{PP}\text{of John}]]]$

b. $[_{S}[_{NP}\text{John}][_{VP}\text{was}[_{V}[_{V}\text{taken advantage}]\ \text{of}]]]$ (Bresnan 1982: 61)

そして（6a）で *make fun of* の *fun* を主語とした受動文が容認されないのは，この表現が語彙目録で複合動詞としての構造しかもたないためであると述べている。しかし，この分析ではイディオム内部の名詞を主語とした受動文の容認可能性という統語的な事実に基づいて，それぞれのイディオム表現の構造が個々に語彙目録で規定されているめ循環論に陥りかねない。ここには *make fun* がなぜ複合動詞としてのみ解釈されるのかという根本的な問題が未解決のままになっている。

また，更に同様のことは同族目的語構造にも見られ，この構造が様態の副詞で言い換え可能かどうかや，受動文の容認可能性は従来の分析では(9)や(10)のように同族動詞や同族目的語の種類によって区別されてきたが，この分析では（11a-b）の容認可能性の違いを説明できない。

(9) a. Mary smiled a bright smile.

b. Mary smiled brightly. (a ≒ b)

c. *A bright smile was smiled by Mary.

(10) a. Fred sang a comical song.

b. Fred sang comically. (a ≠ b)

c. Comical song was sung by Fred.

(11) a. *A blood-curdling scream was screamed by one of the campers.

b. The blood-curdling scream that they had all heard in countless horror movies was screamed by one of the campers.

(Langacker 1991: 363)

そこで，以下ではこの種の目的語を主語とした受動文が容認可能となるのは，

目的語の解釈（construal）の違いやそれに対応する節全体の意味構造の違いとして捉えることができ，この違いに概念的自立性／依存性という概念が深く関与していることを述べたい。

1．認知文法の基本的な概念と仮定

1.1．典型的事態のモデル

この節ではまず初めに典型的な目的語とはどのようなものかを節構造から考えてみる。節構造の性質は他動性（transitivity）の視点から多くの研究がありHopper and Thompson（1980）やTaylor（1991），またCroft（1994）などでも詳細に議論されているが，Langacker（1991）は他動性のプロトタイプとして，1）出来事（event）に非対称的に関係をもつ個別的な実体（entity）として捉えられる2つの関与体（participant）が存在し，2）動作主（agent）から被動作体（patient）に一方方向的なエネルギーの移動があり，3）被動作体（patient）が直接影響を受けることで状態の変化を起こすという「典型的事態のモデル（Canonical Event Model）」を提案している。従って，典型的な他動性は次のFig.1のような構造をもつと言える。

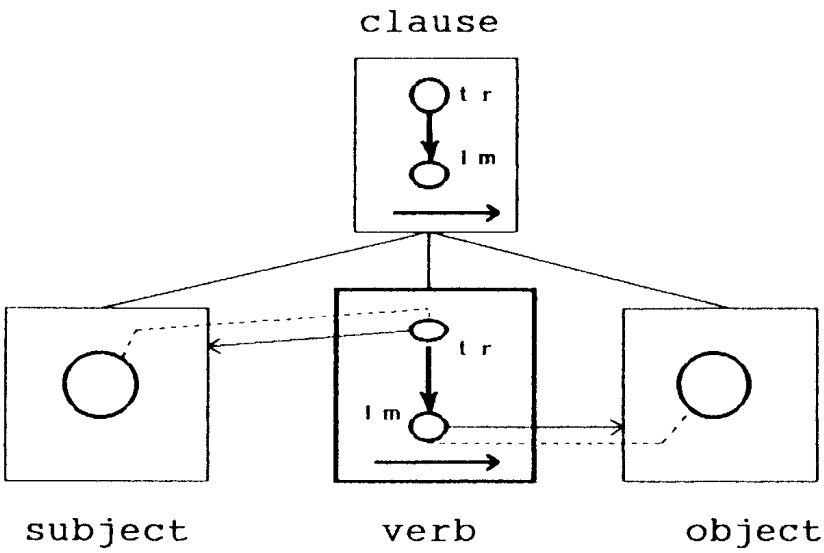


Figure 1　(Langacker 1991: 36)

図の中の tr と lm は trajector と landmark（以下 tr，lm と表記する）で(12)に定義付けられるように関係概念（relation）の中で一番目に目立つ図（figure）とそれ以外の図（figure）である。

(12) **trajector**: The (primary) figure within a profiled relation.

landmark: A salient substructure other than the trajector of a relational predication or the profile of a nominal predication. (Langacker 1987: 490, 549)

また，Fig.1 で動詞が太字の四角で表わされているのはこの要素が全体の意味構造を決定づける要素（profile determinant）であることを示すためである。そして，ここで重要なことはこの図によって示されるように主語と目的語はそれぞれ個別化した概念を表わし，動詞によって表わされるプロセスの下位構造(substructure)を精密化(elaboration)したものであるということである。従って，このようにイヴェントモデルの lm の具現形である関与体として認識されるということが目的語の認知的な地位（status）に深く関与していると言える。

1.2. Base and Profile

認知文法では「意味」は概念化（conceptualization）に還元され，認知的な処理の過程に求められる。このことはある状況をどのように解釈するかということであり，従って意味構造は(13)に定義付けられる背景の知識としての base（基盤）と言語表現が直接明示する指示対象である profile（顕在化）の関係で特徴づけられる。

(13) **base** The cognitive structure against which the designatum of a semantic structure is profiled; the ground with respect to which the designatum is the figure. The base includes specifications in one or more domains, which collectively are called the matrix of the semantic structure. (Langacker 1987: 486)

profile The entity that an expression designates. A substructure within its base that is obligatorily accessed, accorded special

prominence, and functions as the focal point within the immediate scope of predication. (Langacker 1991: 551)

(14) **predication** (semantic structure)

(a) **nominal predication** (that designates a thing). A thing is categorized as a noun that designates a region in some domain.

(b) **relational predication** (that profiles a relation).

(i) temporal relations－verbs

(ii) atemporal relations－prepositions, adjectives, adverbs

そして，(14)のようにある認知領域（cognitive domain）を基盤として特定の領域（region）を顕在化したものが名詞的陳述（nominal predication）で，関係概念を顕在化したものが動詞，前置詞，形容詞，副詞などの関係的陳述（relational predication）であるとすると，品詞の区別は意味構造に関わる認知領域の基盤の違いではなく，それが指示する概念内容（conceptual content）の解釈の違いとして捉えることができる。たとえば *into* と *enter* では Fig.2 の a. と b. に示されるように個別的な 2 つの実体が最終的に一方が他方の中に包含されるという概念内容は同じであるが，*into* の場合には時間が概念化されていない非時間的な関係（atemporal relation）を表わしているのに対して，*enter* で

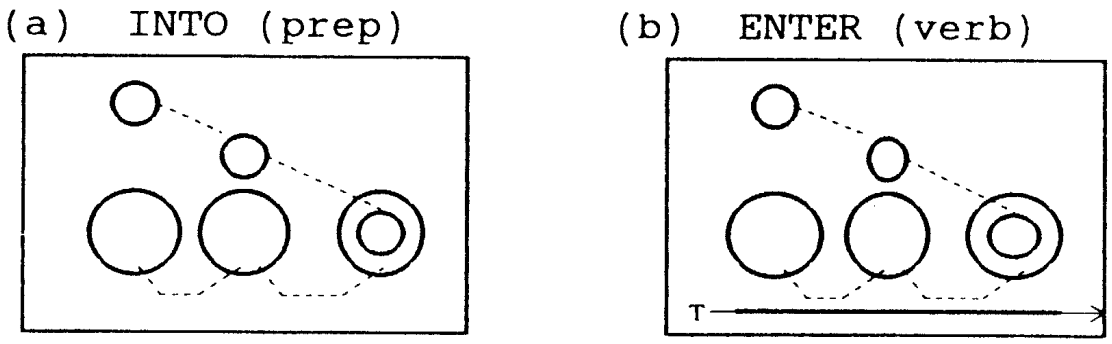


Figure 2 (Langacker 1990: 38)

は時間自体も概念化されているという点で異なっている。

また，同じことは(15)のような動詞とその名詞化の場合にも見られる。

(15)

Verb	Nominalization
explode	explosion
propose	proposal
prepare	preparation

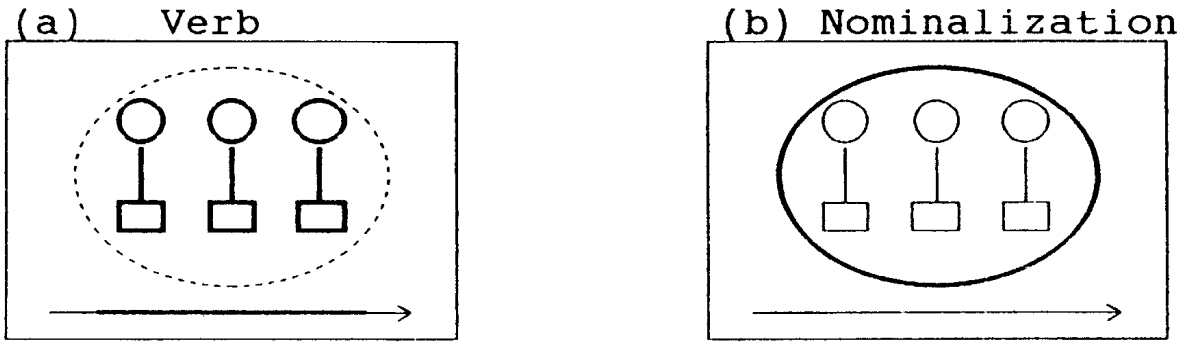


Figure 3 (Langacker 1987a: 90)

Fig.3 (a-b) は動詞とその名詞化の意味構造をそれぞれ図示したものである。具体的には(a)の動詞の場合は時間の経過と共に連続的につながっていく一連の動作を構成する要素（component）からなるプロセスを表わし，破線の楕円はそれぞれの構成要素間のつながりによってできた潜在的な領域を示している。しかし，その領域そのものが際立っている (prominent) として認識されるのではなく，ひとまとまりの動作を表わす個々の構成要素の互いに関係をもった配列が顕在化されていることを表わしている。それに対して(b)の名詞化では基底にある動詞によって表わされるプロセスの概念を基礎としてその構成要素の集合が一つの抽象的な領域として顕在化されていることを示している。このように動詞とその名詞化では概念内容であるイヴェント自体は同一であり，両者の違いはどの部分を顕在化しているかという点で異なっているということになる。

1.3. Autonomy and Dependence

1.2節では名詞的陳述は'thing'を指示するのに対して，関係的陳述はプロセスかあるいは非時間的な関係を指示する点で異なっていることを述べたが，この両者はまた概念的自立性と依存性という点でも対立をなしている。

Langacker（1991）はこの依存性という概念を(16)のように定義している。

(16) **dependence** The degree to which one structure presupposes another for its manifestation. (Langacker 1991: 547)

そして典型的には（14b）の関係的陳述はその概念化に際してその関係に関与する他の実体の存在を前提とするため，概念的に依存的な概念であるということになる。一方，（14a）の'thing'を表わす名詞的陳述，例えばtreeやcatなどはその概念化に他の実体の存在を前提としていないので概念的に自立的な概念であると言える。しかしこの自立性と依存性の非対称性は程度の問題であり，名詞もその解釈によって関係概念を含意し，概念的に依存的として認識される場合もある。例えば*arc*や*hypotenuse*ではその基盤（base）にそれぞれが表わしている部分に対する全体を表わす円や直角三角形という概念が認知的にあることは確かであり，また*uncle*，*friendship*などでも同様に，*uncle*はその基盤にある自己（ego）をlmとする親族関係の一部として概念化することも可能であり，*friendship*では複数の関与体の特定の関係が意味構造に含まれていると考えることもできる（cf. Langacker1987: 218，井筒 1995：14）。また，更に(15)で見た動詞が非動作化された名詞の場合も，コト的に解釈されその基底にあるプロセスの概念が潜在的に含まれていると認識される場合には概念的に依存的であると言える。従って，このことから(17)のようにまとめることができるが，ここで重要なことは，名詞がその概念化のされ方によって3つに下位区分されるということ，そして，この概念的自立性／依存性がそのどちらとしてより認識されやすいかという度合いの問題であるとするとrelational nounやdeverbal nominalも概念的により自立的として認識される可能性もあるということである。

(17) a. conceptually autonomous structure — nominal predications (e.g. tree, cat,...)

b. conceptually dependent structure — (i) relatonal predications (e.g. explode (v), in (prep), good (adj), carefully (adv),...)

(ii) relational nouns (e.g. arc, hypotenuse,...)

(iii) deverbal nominals (e.g. explosion, preparation,...)

2．軽動詞構文の意味構造

この節では1節でみた認知文法の基本的な概念や仮定と更にもう一つの原理を用いて軽動詞構文の意味構造について考えてみる。

そこでまず，次の（18a）と（18a）の対比を観察してみる。

(18) a. We can have the picture book at that store.

b. Mary had a rest. (≒ rested)

ここでまず気づくことは（18a）の *the picture book* は動詞の表わすプロセスの下位構造である lm の具現形であり，節構造全体は Fig.1 の意味構造をもつと言えるが，（18b）はそのようには考えられないということである。むしろ（18b）の *have a rest* では意味の中核部分は *a rest* にあるのであって，*have* は意味的に空虚（semantically vacuous）（cf. Givón 1993：114）であり，通常は時制や人称や数などを表わす文法的な機能のみを担っているものと理解される。また，このように「意味の一般化（generalization）」の現象を受けやすい動詞は上位概念を表わす語（superordinate terms）に多く，(19)のように *make*，*get*，*take*，*give* のようなものがあるこはよく知られている。

(19) a. to make a decision (≒ decide)

b. to get possession of a house (≒ possess a house)

c. to take a bath (≒ bathe)

d. to give a cry (≒ cry)

そしてこのように意味的な内容がもっぱら動作名詞（action nominal）にあり，それに対して主動詞が慣習化による意味の一般化を受けている場合には，動詞

と動作名詞の意味的な関係は Fig.1 の「標準的事態のモデル」とはかなり異なっていることは明らかである。この場合にはむしろ，主動詞が抽象的なプロセスの概念のみを表わすスキーマとして機能し，動作名詞によってその概念が具現化されていると考えることが可能である。そこでこの関係を(20)のように示すことができる。

(20) [[A]-[B]]→[B] A: schema, B: instantiation

schema Structure A is a schema with respect to structure B when A is compatible with the specifications of B but characterizes corresponding entities with less precision and detail.

(Langacker 1987: 492)

つまり，スキーマ(A)とその具現形(B)とが認知的に完全に一致しているため，両者が重ね合わされた場合にスキーマが具現形にいわば飲み込まれ，その結果合成された構造が(21)の schematic-transparency principle に従ってその具現形の意味的な価値（semantic value）に等しくなるのである。

(21) **Schematic-tranparency principle:**

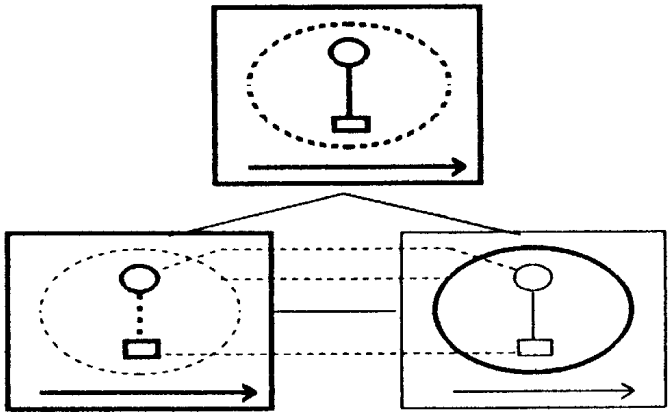
The tendency for the sanctioning and target structures to merge into a single, consistent conceptualization when there is full consistency between their specifications. When a schema merges with its instantiation, the resulting structure is equivalent to the instantiation.

(Langacker 1987: 492)

従って，このような場合の動詞と目的語の意味構造は Fig.4 のように示すことができる。

そして，このように（18b）や(19)の目的語の非典型性が Fig.4 に示されるスキーマとその具現形という認知構造に起因するため，その結果動詞と目的語という連鎖が概念的に融合し，単一の概念を表わしているものとして認識されやすく，それぞれの括弧の中の動詞と意味的な等価性をもつのだと言える。そしてここで注意が必要なことは定義上スキーマに対する具現形であるという認識は両者の間に認知的な対立（conflict）がないことで可能になるわけであるが，この場

composite structure



(schematic process) (deverbal/action nominal)

Figure 4

合の動作名詞は非動作化された名詞概念（deverbal nominal）であり，いわばイヴェント性を semi-active な概念（cf. Chafe 1987）としてもっているために，この両者の「動詞」と「名詞」という範疇間の認知的な対立が最大限に中和されると言うことである[2]。

そして，更に言えばこのような視点からこの現象を分析する利点の一つは，この Fig.4 の意味構造を支えるのは軽動詞構文の目的語が概念的に依存的であるからであるが，この自立性／依存性という概念は 1.3 節で述べたように程度の問題であるから，この種の目的語が何らかの動機付けによって客体化され，モノ的に概念化されることで Fig.1 のイヴェントモデルの関与体的に振舞うことを自然に説明できるということである。そこで次の(22)の文を観察してみる。

(22) a. *A delightful bath was taken

b. *A pleasant walk was taken across the field. (= 4a)

c. Several rests were taken on the way up the mountain.

d. A ten-minute break was taken between classes. (= 4b)

e. An offer of money was made to the police.

ここで（22a-b）が容認されないのは *delightful* や *pleasant* がいわゆる「転移修飾語句（transferred epithet）」であり，「入浴する」あるいは「散歩する」とい

う行為によってその行為者が *delightful* であり，あるいは *pleasant* なわけであるから，この場合は基底にあるプロセスや行為者の概念が深く関与しており，従って *a delightful bath* や *a pleasant walk* が概念的に依存的であるためである。それに対して(2c-e)が容認可能であるのは，この場合動作名詞によって表わされる行為が *several* や *a ten-minute* あるいは *of money* によって限定されることで境界のはっきりとした客体化された概念として解釈されるためであると考えられる。つまり，特定の行為者を想起することなく概念化される程度により自立的な一般概念として解釈されるからである[3]。そして，このように考えてくると，この概念的自立性／依存性という認識の交替は人間の認識作用の重要な一部をなすものであると言える。

3．V-NP-PP 型のイディオムの意味構造

この節では V-NP-PP 型のイディオム表現内部の目的語の性質について考え，次の 2 つの点について議論する。1 つは Bresnan が（7a-b）として示した 2 つの構造の違いが何によって生じるのかを考察し，イディオム内部の名詞が動詞に編入（incorporate）されているかどうかという認識はその名詞の解釈（construal）の違いに起因する概念的自立性／依存性の度合いの問題として説明することが可能であるであることを述べる。2 つ目として先に見た（5a）に対して（6a）が容認されないのは *make fun of* に類するイディオムが軽動詞構文と似た意味構造をもつことに起因することを述べる。

そこでまず初めに(7a-b)の 2 つの構造，つまりイディオム内部の名詞が動詞に編入（incorporate）されて複合動詞をなしている構造とその名詞が目的語として機能している構造での名詞の認知的な地位の違いについて考えてみる。

(23) John took advantage of Fred.

このことを(23)の文を例に考えてみると，*advantage* の可能な解釈の一つはそれが主語（John）と前置詞の目的語（Fred）との関係で概念化されている場合で，この場合 *advantage* は関係概念に依存した名詞（relational noun）であるため，

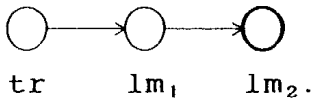
概念的に依存的だということになる。それに対してイディオム内部の名詞が動詞に編入されていないと解釈される場合には，すでにこのような解釈そのものの中に *advantage* の表わす概念の客体化という認知作用が含まれている。そしてこのことから(24)のようにイディオム内部の名詞を概念的自立性／依存性の問題として捉えることでこの名詞を主語とした受動文の容認可能性を自然に説明することができる。

(24) V-NP-PP (NP: [conceptually autonomous/dependent])

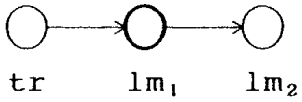
つまり受動文が(25)に示される際立ち（prominence）の移行によって起こる意味的拡張（semantic extension）であるとすると，受動文の主語になるのは動作主（agent）以外の一番目立つ要素，つまり 'primary' lm ということになる。

(25) [[**AG** (ent) ⟹ TH (eme)] - - - - - > [AG ⟹ **TH**]]

(Langacker 1991: 341)

(26) a. 

(lm_1: conceptually relational noun)

b. 

(lm_1: conceptually autonomous noun)

そこでイディオムの中の名詞（lm_1）が主語（tr）と前置詞の目的語（lm_2）の間に成り立つ関係概念を表わし，概念的に依存的である場合には当然 lm_1 よりも tr や lm_2 の方が目立ち度は高いと認識される。そのため(25)の意味的拡張が起こると際立ちを与えられるのは（26a）のように前置詞の目的語である lm_2 であり，この要素が受動文の主語になりやすいと言える。

それに対してイディオム内部の名詞が概念的により自立的である場合にはその要素に概念主体（話者／聴者）の注意が向けられているわけですから，この場合には lm_1 が (26b) のように前置詞の目的語の lm_2 よりも意味的に優位として認識されれば(25)の過程によって今度は lm_1 が受動文の主語になりやすくなる。そして次の (27a-b) の対比はこの認知作用を反映しているものと言える。

(27) a. Too much advantage has been taken of the homeless.

b. *The homeless have been taken too much advantage of.

(Nunberg and Wasow 1994: 522)

つまり，ここでは *too much advantage* の方が *the homeless* よりも意味的に優位であることが容認可能性の判断に深く係わっている（cf. 葛西 1992，1995）。

従ってこのことから(28)の容認可能性も同じように説明できる。つまりそれが容認可能となるのは，*tabs* や *fault* が 'thing' を表わし，概念的により自立的な要素として認識され得るからである。

(28) a. Tabs were kept on all persons entering the station.

b. No fault could be found with Inge's performance.

そしてここで明確にしておかなければならないことは，この場合の概念的自立性／依存性はイディオム内部の名詞が客体化されているのか，あるいはそれが主語と前置詞の目的語との間に成り立つ関係概念として概念化されているかの違いであり，それに応じて名詞の表わす概念が「前景化」あるいは「背景化」されるということでる。従って，いずれにしてもイディオム内部の名詞は Fig. 5 のように動詞によって表わされるプロセスの下位構造の具現形であると言える

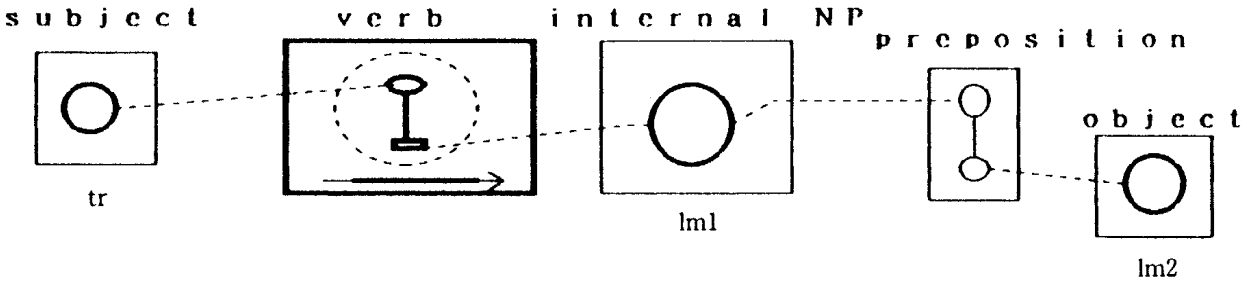


Figure 5

る。

しかし，それに対して次の(29)はこれと同じには考えられない。

(29) a. *Sight was caught (gotten, had) of Mary in the crowd.

b. *Hold was gotten of the rope.

c. *Fun is being made of John by his students. (Bresnan 1982: 57, 60)

なぜなら，*sight*，*hold*，*fun* は非動作化された名詞概念（deverbal nominal）でありその概念そのものの中に関係概念が含まれており，そのために概念的に依存的であるからである。結論的には，このようなイディオム表現の意味構造は Fig.4 の軽動詞構文の場合と基本的には同じ構造をもつと言える。つまり，*catch*，*get*，*make* は抽象的なプロセスの概念を表わすスキーマであり，*sight*，*hold*，*fun* がそれに対する具現形という関係になっていると考えることができる。そしてこのように考えることで Nunberg and Wasow（1994）が，この種のイディオム表現の場合には（30a）のようにその内部の名詞に修飾語句を付加し難いと述べ，また，インフォーマントの判断でも同様に（30b-c）が容認されにくいということを原理的に説明することができる。つまり，このことは(29)のイディオムが固定化した表現であることに加えて，スキーマと具現形が認知的に完全に一致しているために，*sight*，*hold*，*fun* の表わす概念はその境界がはっきりとしたものとして認識し難く，従ってこの場合，軽動詞構文の意味構造である Fig.4 とは違ってその合成の経路（compositional path）が見え難いために，それだけ凍結度（frozenness）が高くなっているということにその原因を求めることができる。

(30) a. *Pat took clammy hold of Chris's hand. (N and W 1994: 524)
b. *Mary caught accidential sight of Jane.
c. *John made malicious fun of the boy.

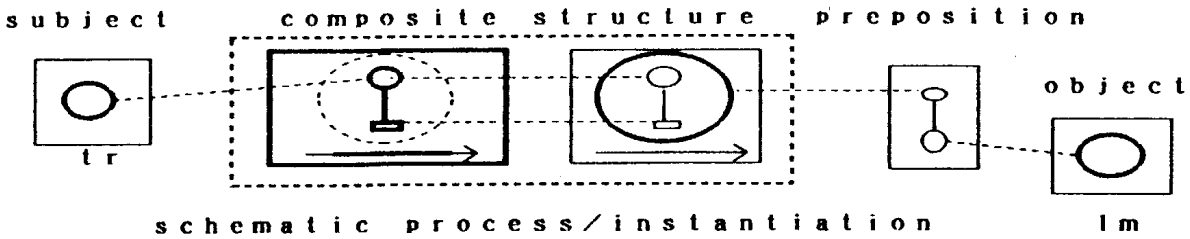


Figure 6

従って，この場合の意味構造は Fig.6 として図示することができる。
この図は主動詞が抽象的なプロセスを表わすスキーマであり，それに後続する

名詞がスキーマに対する具現形であるためにこの両者の概念が融合し，単一の概念として認識されていることを示してる。従ってこの場合，関与体は主語と前置詞の目的語しかなく，イディオムの中の名詞は関与体としては認識されないために，この要素を主語にした受動文も容認されないことになる。そして更に言えば，*take advantage* が複合動詞をなすのは *advantage* が「背景化」されているからであり，*make fun* が複合動詞をなすのとは意味構造が違っているわけであるから，このように分析することによって少なくとも Nunberg and Wasow が (31a) のように述べながら，(31b) では *full* は *advantage* の修飾語としては 'common' なので *take full advantage* はやはり複合動詞となっているという説明の不自然さを回避することができる。

(31) a. ...internal modification of an idiom chunk entails that that part of the idiom has an idiomatic meaning. The lexical verb *take advantage* should therefore not permit internal modification of *advantage*. It follows that internal modification of *advantage* should be incompatible with the outer passive.

b. Not even six Cochise fielding errors were taken full advantage of. (Nunberg and Wasow 1994: 521)

しかしこれまでに述べた分析にも次の(32)に見られるような一見反例と思われるものがある。

(32) a. Use was made of Sikolsky's pigeon-holing lemma. (Ross 1986: 136)

b. Care was taken of the infants. (Nunberg and Wasow 1994: 502)

c. Heed was paid to John.

d. No notice was taken of Simone. (Bresnan 1982: 60)

e. Close attention is being paid to present movements in the money market. (嶋田 1985：116)

f. Reference was made to the book during the debate. (ibid: 114)

つまり(32)のイディオム表現では(29)の場合と同様に *use* や *care* などは非動作化された名詞概念で関係概念を表わしており，主動詞の表わすスキーマに対する

具現形であるように見える。そして確かに(29)と(32)はどちらもそのイディオム表現によって示される特定の行為(action)の結果としてイディオム内部の名詞によって指示される関係概念(relation)が成立することでは共通している。従ってこの点では共にFig.6の意味構造をもつと言える。にもかかわらず(32)は(29)とは違い内的受動態が可能である。ここで(32)の文の容認可能性を動機付ける要因は結論的には軽動詞構文で受動文が容認可能となる場合と同じように考えることができる。つまり，(29)の *hold* や *fun* とは違って *use* や *care* などは「使用」や「世話」というように特定の行為者を想起することなく概念化され得る程度に一般化された概念としても確立されており，この意味では *use*, *care* などの概念を客体化することが可能であり，その結果，*use* や *care* がFig.5の意味構造の lm_1 の具現形として解釈されるためであると考えられる。そして次の(33a-b)の対比で(33a)とは違って(33b)で代名詞による照応が可能になるのは，*care* が輪郭のはっきりとした個別的な概念を表わしていることを裏付けるものと言える。

(33) a. *I thought Pat would take hold of the rope, but he took it of the rail instead.

b. Care was taken of the infants, but it was insufficient.

(Nunberg and Wasow 1994: 502, 524)

また更に，(32)のようなイディオムの場合には(32e)や(34)のようにイディオム内部の名詞を形容詞で修飾することが可能であるから，*make fun of* のような表現よりも分析性(analizability)が高く，このことが *use* や *care* などの概念を客体化し一般概念として捉え直す重要な基礎を与えるものと考えられる。

(34) a. Bill made fruitful use of the facilities.

b. Mary took excellent care of the orphans.

4．同族目的語構造について

2節と3節では軽動詞構文の目的語や *catch sight of* に類するイディオム表

現内部の目的語が非典型的として認識されるのは動詞と目的語の関係がスキーマとその具現形の関係にあり，目的語が動詞によって表わされるプロセスの概念全体を精密化していることに起因することを述べた。そこで以下では濱田（1996）の議論に基づきこのことが同族目的語構造にも共通することを述べる。

濱田（1996）は同族目的語を(35)のように定義し，同族目的語の概念化の様式には(36)のように2種類があると仮定した。

(35) Cognate Object:

Cognate object represents the nominal conceptualization of the process described by an action verb, and the existence of the entity described by the object is typically limited to the timespan of the action the verb designates.

(36) mode of conceptualizaton
- (a) eventive
- (b) thing-like

つまり，定義上同族目的語は動詞によって表わされるプロセスを実体化したもので，その概念の存在は出来事の時間の範囲に限定されているわけであるから，1つの解釈のタイプとしてはこのように概念化された実体はその基底にあるイヴェント性が背景化されて意識の中にあるという意味でsemi-activeな概念として認識されていると言える。これが(36a)の概念化のタイプである。またもう1つのタイプは(36b)のように同族目的語の表わす概念それ自体はイヴェントの時間の範囲の中にあるが，それが時間の範囲の外にある類概念との比較で記述さるために，同族目的語の表わす概念が客体化され，そのためにモノ的に解釈される場合である。

そしてこのように概念化のタイプを区別することで次の事実を自然に説明することが可能となる。

(37) a. She slept a sound sleep. ≒ She slept soundly.

b. Harry lived an uneventful life. ≒ Harry lived uneventfully.

c. John smiled a nervous smile. ≒ John smiled nervously.

d. John died a gruesome death. ≒ John died gruesomely.

e. Bill sighed a weary sigh. ≒ Bill sighed wearily.

f. Mary laughed an unpleasant laugh. ≒ Mary laughed unpleasantly.

g. Cassius fought a fair fight. ≒ Cassius fought fairly.

(Jones 1988: 89, 93)

(38) a. Sam danced a merry dance. ≠ Sam danced merrily.

b. Mary sang a beautiful song. ≠ Mary sang beautifully.

(Jones 1988: 91，荒木・安井編 1992：256)

(39) Mary danced a sexy dance. ≒ Mary danced sexily.

つまり，同族目的語が様態の副詞で言い換え可能かどうかは(37)と(38)の対比を見る限りでは従来から指摘されてきたように同族動詞やそれを名詞化した同族目的語の種類によって区別することが可能であるように見える。しかし，そうすると(39)の様態の副詞を伴った文との意味的等価性を例外として扱わなければならない。また，(38a) は Jones (1988) からのものであるが，彼自身も注の中でこの 2 つの文が意味的に等価である可能性のあることを示唆してる（Jones 1988: 91)。従ってこのような事実は認知的なレヴェルで同族目的語の解釈には(36)で示した 2 つの様式があり，無標 (unmarked) にはどちらかとして解釈されやすいという傾向はあるが，潜在的にはどちらの解釈も可能であり，適切な動機付けによってそのうちのどちらかとして認識され易くなると考えるのが自然だと言える。濱田（1996）はこれを動機付ける要因は，話者が同族目的語の概念を修飾語句を用いて形容する場合の「判断の基準」や「修飾語句の機能」の違いであるとし，表 1 のようにまとめた。

（濱田　1996：74）

mode of conceptualization	norm of judgment	function of modifier
eventive	speaker-related	evaluative
thing-like	object-related	identifying

Table 1

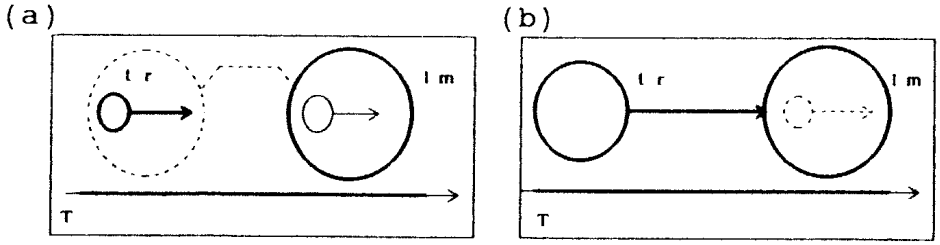


Figure 7 (濱田 1996: 74)

そしてこのような議論から，Fig.7（a-b）の2つの意味構造を仮定した。

このFig.7（a-b）では共にtrは行為の主体である主語を表わし，矢印は同族動詞によって具現されるある一定の行為（action）を表わし，またlmは同族目的語を表わしている点では共通しているが，(36)で示した同族目的語の解釈の違いのために構造全体はかなり異なっている。そこでまずFig.7(a)の意味構造について見ていくと，この構造では同族目的語の表わす概念はイヴェント性をsemi-activeな概念としてもち，関係概念を表わしているため概念的に依存的であると言える。このことはlmの中に描かれた小さな円と矢印が細線になっていることで表わされている。また，それが動詞によって表わされるプロセスを実体化したものであるために，動詞と認知的に対応関係をもつが，この関係は両者を結ぶ点線で示されている。従って，このモデルの動詞と同族目的語の関係は(20)のスキーマの定義からすると，やはりスキーマとその具現形の関係にあると言えるため，これまで見てきた非典型的な目的語と同じ意味構造をもつことが分かる。

それに対してFig.7(b)は同族目的語の表わす概念が「対象依存的な基準」によって他の類概念との比較で記述されているために，その概念の客体化という認知作用がおこり，より概念的自立性が高まることで関与体（participant）的に認識されていることを表わしている。

そしてこのようにFig.7(a-b)の2つの意味構造を仮定することで次の事実を的確に捉えることがでる。

(40) a. *A sound sleep was slept by Mary.

b. *An uneventful life was lived by Harry.

c. *A nervous smile was smiled by John.

d. *A gruesome death was died by John.

e. *A weary sigh was sighed by Bill.

f. *An unpleasant laugh was laughed by Mary.

g. *A fair fight was fought by Cassius. (Jones 1988: 91, 94)

(41) a. A merry dance was danced by Sam. (ibid: 91)

b. A beautiful song was sung by Mary. （荒木・安井 1992：256）

つまり(40)と(41)はそれぞれ(37)と(38)の文に対応する受動文であるが，ここで受動文の容認可能性の違いは Fig.7(a-b)のどちらの意味構造をもつかという問題に還元することができ，受動文が容認可能となるのは，その主語が Fig.7(b)の lm のように関与体的に解釈されている場合であると言える。そしてここで重要なことは次の(42)，(43)から明らかなようにこの Fig.7(a-b)のどちらの意味構造をもつかは同族目的語の名詞の種類によって自動的に決定付けられるのではなく，あくまでも同族目的語によって表わされる概念の解釈（construal）の違いに因るということである。

(42) a. *A blood-curdling scream was screamed by one of the campers.

(=11)b. The blood-curdling scream that they had all heard in countless horror movies was screamed by one of the campers.

(43) a. *A sound sleep was slept by Mary. (=40a)

b. A sound sleep was slept by Mary, but John could not sleep well.

つまり，(42a) や (43a) に対して (42b) や (43b) が容認可能となるのは (42b) や (43b) の同族目的語が「対象依存的」に他の類概念との比較で記述されているために，客体化されモノ的に捉えられているということ，そしてこの類概念は通常経験的に聞き手と共有していると考えるのが自然であるため，その修飾語句は話者の意図している概念を聞き手が同定することを可能にする機能を担っており，そのために同族目的語の表わす概念が聞き手にとってより接近可

能で，個別的な概念として認識されることでFig.7 b の認知構造をもつからである。

(44) a. He died the death of a Christian. (Jespersen 1961: 235)

b. The old man laughed one of those short Pict laughs—like a fox barking on a frosty night. (ibid)

c. Mr. Hamlin smiled the smile which he had before worn on the Wingdam coach. (山川 1968：37)

d. She lived a life that was a repetition of her parents'.

(小西 1980 882)

そして更にこのことは，上記の(44)の例では同族目的語が「対象依存的な基準」で判断され，また修飾要素が同定機能を担っていることは明らかであるが，このような場合にその受動文(45)が容認可能となることで裏付けることができる。

(45) a. (?) The death of a Christian was died by Harry.

b. The smile which he had before worn on the Wingdam coach was smiled by Mr. Hamlin.

c. One of those short Pict laughs was laughed by the old man.

d. A life that was a repetition of her parents' was lived by Mary.

5．まとめ

以上小稿では軽動詞構文の目的語やイディオム表現内部の目的語，そして同族目的語の非典型性について考察し，その非典型性には共通性が見られることを認知文法の視点から述べた。最後に要点を繰り返すと，次の4点にまとめることがでる。1）軽動詞構文の目的語や，イディオム表現内部の目的語，そして同族目的語の非典型性は動詞と目的語との関係がスキーマとその具現形の関係にあり，従って目的語が動詞によって表わされるプロセスの概念の全体を精密化しているという点で共通性をもっている。2）このことはこの種の目的語がイヴェント性をsemi-activeな概念としてもつと認識されるため，関係概念

(relation)を表わし概念的に依存的であることに起因する。3)概念的自立性／依存性の非対称性は固定的なものではなく程度の問題であり，この関係概念を表わしてる非典型的な目的語も適切な動機付けが得られる場合には客体化されその概念的自立性が高まる。4)このような認知過程によってその名詞はイヴェントモデルの関与体的に振舞い，その結果この名詞を主語にした受動文の容認可能性が高まる。

注

1　(8b) について Bresnan は(i)に示される V-P Incorporation が適用され，前置詞の of が [take advantage]$_V$ に編入 (incorporate) されて (P OBJ) が (OBJ) となることで受動化が可能になると論じている。

(i)　V-P Incorporation:
Operation on lexical form: (P OBJ)⇨(OBJ)
Morphologocal change: V ⇨[V P]$_V$

2　このことは Hopper and Thompson (1984) の次の主張によっても支持される。

(i)　...a nominalization names an event as an entity, ...The event has not ceased to be an event, but is treated grammatically as if it were an entity, so that it can be commented on as such.

(Hopper and Thompson 1984: 745-746)

3　このことは Givón (1993) の(i)の主張や Ruwet (1991) の(ii)の主張からも支持が得られる。

(i)　By objectivizing the activity itself, one somehow endows it with patient-like properties, viewing it as product of the event.

(Givón 1993: 113)

(ii)　...one of the conditions on the acceptability of passive sentences lies in a certain "referential autonomy of its subject.

(Ruwet 1991: 184)

References

荒木一雄・安井　稔編（1992）『現代英文法辞典』 東京：三省堂

Ariel, M. (1988) "Referring and Accessibility," *Journal of Linguistics* 24, 65-87.

Bresnan, J. (1982) "The Passive in Lexical Theory." *The Mental Representation of Grammatical Relation.* Bresnan (ed.) Cambridge: Harverd University Press.

Chafe, W. (1987) "Cognitive Constraints on Information Flow," in Tomlin, R. (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse.* Amsterdam: John Benjamins, 21-51.

Croft, W. (1994) "Voice: Beyond Control and Affectedness," *Voice - Form and Function.* Fox, B and P, Hopper (eds.) Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Fraser, B (1970) "Idioms within a Tranformational Grammar," *Foundations of Language* 6, 22-42.

Givõn, T. (1993) *English Grammar* I. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

濱田英人（1996）「同族目的語構造について」『北海道英語英文学』41，67－80.

Hopper, P. and Thompson, S. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56-2, 251-299.

_____ (1984) "The Discourse Basis for Lexical Categories in Universal Grammar," *Language* 60, 703-752.

井筒勝信（1995）"Phases and their linguistic forms." A thesis submitted to Hokkaido University as a partial fulfillment for qualifying as a Ph. D candidate.

Jespersen, O. (1961) *A Modern English Grammar* III. London: George Allen and Unwin.

Jones, M.A. (1988) "Cognate Object and the Case-filter," *Journal of Linguis-*

tics 24, 89-110.

葛西清蔵（1980）「〝to dream a strange dream〟の構造」『英語学論説資料 14』（第 3 分冊）723－734.

_____（1992）「いわゆる「指定主語条件」について」『函館英文学』31，61－69.

_____（1995）「いわゆる MCP（主節現象）について」『北海道大学文学部紀要』42－2，81－109.

柏野健次（1993）『意味論から見た語法』東京：研究社

倉田　達（1971）『英文法論叢―同族目的語と直喩』東京：篠崎書林

小西友七（1980）『英語基本動詞辞典』東京：研究社

Langacker, R.W. (1987a) "Nouns and Verbs," *Language* 63, 53-94.

_____ (1987b) *Foundations of Cognitive Grammar,* Vol.1. Stanford: Stanford University Press.

_____ (1990) "Cognitive Grammar: the Symbolic Alternative," *Studies in the Linguistic Sciences.* 20-2, 3-30.

_____ (1991) *Foundations of Cognitive Grammar,* Vol.2. Stanford: Stanford University Press.

_____ (1995) "Raising and Transparency," *Language* 71: 1-62.

Newmeyer, F (1974) "The regularity of idiom behaviour," *Lingua* 34, 327-42.

Nunberg, G. and T. Wasow (1994) "Idioms," *Language* 70:491-538.

Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language,* London: Longman.

Rice, S.(1987) "Towards a Transitive Prototype: Evidence from Some Atypical English Passive," *BLS* 13, 422-434.

Ross, J. (1986) *Infinite Syntax.* Norwood: ABLEX.

Ruwet, N. (1991) *Syntax and Human Experience.* Chicago: The Universiry of Chicago Press.

嶋田裕司（1985）『句動詞』新英文法選書　第 5 巻　東京：大修館書店

Taylor, J.R. (1991) *Linguistic Categorization.* Oxford: Oxford University Press.

トウメイ美穂（1995）「英語の〝do NP″形と日本語の「NPする」形の認知構造について」『北海道英語英文学』40，89－99.

山川喜久男（1968）『主題と陳述（下）—英語の語法　表現編』第8巻　東京：研究社